

## 森は海の恋人

### ～人の心に木を植える～<sup>1</sup>

島山重篤

#### 1. 漁師が環境活動を始めた経緯

私は、宮城県の北の端の気仙沼湾で、カキやホタテを養殖している漁師です。

昭和40年頃から気仙沼湾の環境が悪化し、カキが育たなくなりました。

養殖は餌をやる必要がありません。海が餌の植物プランクトンを提供してくれるからです。カキの漁場は淡水と海水の混ざる汽水域です。日本のカキの60%を産出する広島は、太田川が流れ込む大汽水域で、アメリカのカキの大産地は、ミシシッピ川が大西洋に流れ込むニューオーリンズです。カキは1日に200リットルの海水を吸い込み、植物プランクトンを摂取し成長します。赤潮はカキの嫌いなプランクトンが大発生することで、カキが栄養失調になります。

当時、大川の河口は、水産加工場が垂れ流す排水の中の魚の油が酸化して真っ黒になり、もの凄いいにおいがしていました。母親の実家は農家ですが、私が子どもの頃の田んぼには生き物の音がしたのですが、その頃の田んぼはシーンとしていました。昔の山は雑木林で落葉広葉樹の山でしたが、戦後日本中の山に杉が植えられました。しかし貿易の自由化で外材を買った方が安い時代になり、手入れのしていない杉山は、真っ暗で音がしません。森林が荒れ、腐葉土のない森になり、洪水が起きやすくなりました。

当時日本中で公害問題が起きていました。しかし海の環境の回復は、漁師だけでできることではなく、行政が関わらないとできません。しかし行政の仕組みは縦割りで、水産を扱う行政は海のことしか見ていません。また気仙沼に注ぐ大川は、宮城県と岩手県の県境を流れる二級河川で、上流は岩手県であり、県にまたがる対策が必要です。

それまでは、海のごときはプランクトンを提供してくれる“太平洋銀行”に任せ